

発展の年への抱負

小池 嘉夫

私は今年が CIF ジャパンが飛躍的に発展する年であると確信しています。それは CIF ジャパンに確固たる業績の蓄積があるからです。

今日は1月15日。誰が考えて始めたのか、たいていの人びとはそれに反対もないのか、「便利」に慣らされてしまったのか、疑義やリアクションはないのか、それほど目くじらを立てなくてもいいのか。けれど私には今日が馴染みの「成人の日」なのです。それに今日明日は昔ながらの小正月、ご婦人(女性)のためのお正月です。そこで、CIF ジャパンの会員のみなさまへのご挨拶です。“みなさま明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。”

兎の年として超大型ジャンプが期待出来るといっている証券界などのイージーな考え方でなく、私は今年が CIF ジャパンが飛躍的に発展する年であると確信しています。それは経験則に基づくとは言いながら期待感だけのあちらに対して、こちらは確固たる業績の蓄積があるからです。

CIF INTERNATIONAL との関係では

まず、CIF Int'l との関連でみると竹内会長がこのすべての連絡会議に出席しています。従来は年ごとの活動レポートを提出するのがやつのことでした。しかもレポートの提出先が一定していない時もある、実際のところ CIF Japan のレポートがどの程度に活用されていたかは疑問でした。そうした状態とくらべると現執行部は3年前と比べて大変な進歩を遂げているのです。どなたもご経験のように国際的な連絡調整は人対人のお付き合い以外にないのです。その意味で執行委員会を除くすべての会議をカバーしている会長のご努力には頭がさがります。今や隔年の大会議での祭りで日本ブースは無くてはならないブースだそうです。会長のこうした個人的努力が新

しい執行部を動かして、「50年を経た CIF が次の50年に向かって新しい第一歩を踏み出すのだ」という意欲で新方針を打ちだし、規約の中に活動方針として新たに盛り込みました。いわば次代を担う若者のインクロージャー対策ともうべきもので、竹内会長が従来から主張していた「学生会員の創設と募集」と同一のものです。

クリーブランドで開催された「CIF 50周年記念大会」にも竹内会長、坂本事務局長、梶村夫妻の4人が参加され CIF Japan の存在を誇示しました。ことに梶村さんはその機会を活用して当時の Field Assignment だった施設ジュドソン・リタイアメント・コミュニティの会長と前々から温めていた出版計画を語り合い、施設からの資料提供も受けて「人生を豊かに生きるために必要なものは何かー理想の高齢者施設を求めてー」を上梓しました。この図書は CIF Int'l において高く評価され、CIF 創立 50周年記念シンポジウムの際に会長から感謝の言葉とともに紹介され参加者から祝福を受けました。

CIF Int'l の World News にも日本からの記事が載るようになりました。始めは竹内会長の「新生 CIF Japan」を知らせる紹介記事でした。私も駄文 (Stories from Japan) を書かせて頂いておりましたが、意図に叶っているかどうかはともかく編集者の Maria Christopoulou さんからの依頼によるものです。World News の前号 (April 2010) は発刊が約1ヶ月遅れました。理由は編集の最中に彼女のお母様が亡くなられたからでした。そのことを現在の Mimmo Merola 会長から聞いていたのでニュースの発刊後にお悔やみをかねて記事の感想と編集力を評価したメールを送ったのが縁となり、ある種のメル友になりました。次回のキプロス会議にも個人的に参加を要請されま

した。それはともかく、スペインのサルゴサ大学トマサ教授を迎えて行なった講演会は、テーマが「スペインにおける社会福祉教育」で、教授は、それには労働という観点でなく職業倫理によって捕らえられたカリキュラム大系が必要ということでした。この企画は竹内会長、坂本副会長とトマサ教授の長い試行錯誤の末に昭和女子大学の秋山智久先生（1974年シカゴ）のご協力がうまく合致して実現したものです。さっそくWNへ投稿。講演の概要をお知らせかたがた、この企画はEXCHANGE PROGRAMの番外編、専門家派遣プログラムとして位置付けたいかがかという提案をおこないました。同誌にはトマサ教授も投稿され日本の社会福祉教育についての印象を書いていました。今号には筑波大学教授の奥野英子さんが登場しております。1973年ツインシティー・プログラムに参加したさいに得た生涯の友人との出会いを運命的に記述し、その後の交流を家族を包みこんだ楽しい思い出で表現し、かつ「CIPは私の宝函」といいながら、CIPの本質を哲学的に考察した格調の高い内容ですから多くの読者の共感を得ることと思います。

EXCHANGE PROGRAM への参加も

さて、今年はEXCHANGE PROGRAMにひとり応募がありました。40歳台の女性看護師です。彼女はすでにスコットランド・プログラムによって受け入れが決定した、と聞いています。正に近年にない快挙です。このケースにみるように、私たちが人材を派遣すべき分野を医療、教育、女性の地位、人権問題など多方面に広げておくことが必要だと思います。

NPO 法人設立に向けての歩みも

まもなくNPO法人設立認定申請が行われると聞きました。私にはまことにスリリングでかつエンヴィアスなことですが、実に嬉しいです。ことにこの団体が事務所として「からしだね館」をもっていることに重要な意義があります。そのもつ意味はまことに重く、それだけで審査過程の3

分2くらいをクリアしたといっても過言ではありません。恐らく事前協議のさいに会長と坂岡さんとの間で長い議論が交わされたことと思います。そして坂岡さんも「諾」と言う以外なかったのでしょうか。組織確立の前提としての事務局ですから、私たち会員はその辺の呼吸を弁え、坂岡さんにおんぶするのではなく、折りに触れて氏を支持してゆく、という態度が必要でしょう。

わたしたち会員こそが資産です

最後になりますがLast but not leastです。それは私たちCIF ジャパンにとっては各会員こそがかけがえのないAssetなのです。現在の会員の中で事務局とインターネットで結ばれている会員は30名あまりです。これがすべて総合化され、会員相互に複々線発信と受信が出来ないものでしょうか。これは技術に属することではなく、会員が近況なり、業務上直近の情報を交換して、お互いに仕事の上で、また個人的な交友関係において資するという精神だとも思います。



小池、坂本、藤本、奥野各氏 2010年5月

暮れから新年にかけてインド在住のシャハナ・ナンディさん（藤本幸子さん、1973

年コロンバス）が帰国しました。インドが新興ムードに乗って日本語教育の需要が急増している中、これに対応するだけでも大変なのに、今度は、アフリカ絶海の島国モーリシャスに地歩を築いています。モーリシャスの場合は日本の在外公館がクローズされていて、マダガスカルの大使館が兼括しているので、所謂、大使館の建物はあっても大使館員がいないというケースです。これはまったく私の推測ですが、たぶん現地の有力者を名誉領事をお願いして邦人保護の仕事をしていただいているものとおもわれます。最近モーリシャスを通りしてきたという友人がいうところによると、現地に日本人会はあるけれど、会長は日本人じゃないよ、とのことでした。ナンディさんのアプローチは純粹に民間の仕事ですから公的機

関の支援は（いただければまことに幸いです）元来はお願いしないたてまえです。だだいままでの成果はモーリシャス政府への陳情が成功し、モーリシャス政府独自のプログラムとして日本語学校の開始を決定したそうです。そして誰からの支援も期待しない、純粹にモーリシャス政府独自の資金によって日本から2人の日本語教師を雇うことになり、ただいま入選中だそうです。波路がはるかにはるかに続いているかの地での快挙

に拍手をおくりましょう。ナンディさんはあからさまに表明しませんが、彼女の推進力はオーレンドルフ博士の「未来ある若者たち」への思いを受け継ぎ発展させること、それを奥深く秘めておられるのです。

このようにこの一年の活動をつぶさにみて来ると、何ごとかならざることやある、という実感があり、したがって2011年はまさに躍進の年であると言えるのです。

（1964年クリブラント、東京都在住）

CIF スコットランドプログラムへの参加者決定！！

坂本 正路

かねてよりCIFの研修プログラムに、日本から参加者を送り出すことが念願でしたが、このほどCIFスコットランドプログラムへの参加者が決定いたしました。

現在、老人ホームにお勤めで看護師の青木さんです。青木さんは老人ホームのお年寄りが生き生きと生活出来るケアについて学びたいと思っておられたところ、偶然に梶村慎吾さんの書かれた「人生を豊かに生きるために必要なものは何か」に巡り会い、CIFの研修プログラムを知られたのでした。

青木さんからの問い合わせを受けて昨年9月に浅野純江さんと私がお会いし、CIFプログラムの情報を提供いたしました。

青木さんは特に園芸療法を学びたいとの事でしたので数カ国に問い合わせをした結果、スコットランドのプログラムが最適と考え、申請書を提出していただきました。それを受けて10月末に梶村慎吾さん、滝口桂子さん、私の三人で面接を実施し、その結果、研修参加への意欲、英語の能力、いずれも参加者としてふさわしいとの結論に達し、竹内和利会長と浅野純江さんに英文のチェックとCIFジャパンの推薦状を作成していただいて、CIFスコットランドに正式の参加申し込みを11月末にいたしました。12月初旬に選考会が開かれたはずであるのに結果通知が来ず、心配しておりましたが、新年早々1月4日にCIFスコットランドのロバートソン会長より、参加が承認された旨の通知がメールにて送られてきました。程なく正式な文書が送られてきますので、それに従って準備を進めることとなります。

CIFの研修プログラムに日本から参加者を送り出すことが念願でしたが、ようやくそれが実現したことになります。これを弾みとして日本から多くの参加者を送り出したいものです。CIFジャパンのホームページに研修の案内文と各国の研修内容が掲載されておりますので大いに宣伝していただきたいと思えます。

（1971年コロンバス、神奈川県在住）